

2001年度修士論文要旨

ファベイラの女性たちの生殖行動における「選択」 —ブラジルサンパウロ市モンチアズールを事例として—

A study on the reproductive behavior of *favela* women: a case study of Monte Azul in Brazil

開発・ジェンダー論コース 石戸 玲奈 Rena ISHIDO

裕福で教育がある女性は少なく産み、貧しく教育の低い女性は多く産む、といった女性の生殖に関する言説はよく聞かれる。出産を自己管理できない女性は、empowerされていないと考えられたりもする。しかしながら、今日のフェミニズムの議論の中では、出産を自己管理できる女性がempowerされていると考えるのは本当に正しいのか、「女性の自己決定による出産」が問い直されている。

このような関心から本論文では、ブラジル貧困女性の産む/産まないという「選択」が、経済的理由だけでなく、どのような社会・文化的な背景によって規定されているのかを調べ、「選択」の意味を問い直すことを試みた。

調査は、ブラジル・サンパウロ市のファベイラ、モンチアズールの診療所と保育所を訪れる女性たち33人を対象に、質問票を用いた聞き取りを行った。その他、私のホームステイ先の女性との会話や、インタビューに協力してくれた女性の語りを、女性たちの生活をより具体的に理解するために、重要な資料として分析した。

ブラジルでの貧富の格差は、1970年代の軍党政権の下で、また80年代の「失われた10年」でさらに拡大した。大都市であるサンパウロやリオデジャネイロは、この貧富の格差あるいは農村・都市間の格差を凝縮させた場所といえる。その中で、ファベイラは、農村から仕事を求めて都市に移住する低所得層に、安価な居住地を提供する役割を果たす。人々が、経済的な制限からファベイラに居住地を求めていることは、否定できない。しかしここでは、人々が自分達のニーズに合わせた優先順位に基づいて、ファベイラを生活しやすい場に行っている行為に目を向けることが重要である。モンチアズールでは特に、ドイツ系NGOと住民組織によって、ファベイラとしては比較的質の高い社会及び居住環境をなしている。それはま

た、子育てをする女性たちにとっても重要なのである。

ファベイラにおいて、避妊の失敗からくる計画外の妊娠・出産は日常化しており、安定したパートナーがいれば、養育は経済的により楽ではあるが、そうでない場合も多い。それでも、女性たちが産むことを「選択」する場合、その背景には、マチスモという価値規範が働いていることが考えられる。つまり、マチスモは男性に養育の責任を果たさせることを期待しない文化であり、それによる女性への一方的な負担を女性たち自身が受け入れ、自己肯定するように働く。

一方、経済的に不安定である女性たちの子育てを可能にするのは、ファベイラ内にある社会資源である。つまり保育所や診療所、NGOによる共同施設や近隣、親族同士の協力関係である。

母親たちの多くは、働きに出るために子ども達を保育所に預けるが、それ以外にも兄弟姉妹や親戚同士が近くに住むファベイラでは、子どもを誰かに預けることがより容易である。身内でなくとも近所の人にわずかなお金を払って面倒をみてもらうこともある。10歳ぐらいの子ども達が、小さい弟妹や親戚の子どもを連れてくる姿も見かける。このようにファベイラの母親たちには、お金がなくとも子ども達をどうにか育てていく「すべ」がある。だからこそ「欲しくなかった」と言いながらも、子どもを産むことを肯定できるのである。

以上のように、女性たちが出産に至る背景は、経済的にだけでなく、社会・文化的にも規定されていることが明らかとなった。女性たちは多くの場合、産むことを「選択」するのではなく、受け入れているというべきだろうが、この受け入れるという態度は必ずしも消極的なものではなく、むしろ子育ての価値を肯定し、かつその責任を自覚した上での受け入れであるといえる。